

日本労働年鑑 第26集 1954年版
The Labour Year Book of Japan 1954

第一部 労働者状態

第五編 労働者の生活

第二章 栄養

第三節 林業労働者の栄養状態

農林省林野庁は一九五〇—五一年度、冬山一二四世帯、夏山一四三世帯の、国有林における林業労働者の生計費調査を実施したが、その結果あきらかにされた栄養状態をつぎに記述しよう。なお、この調査は、第七編第一章「林業労働者の状態」においてのべられている通り、わが国では最初に実施された全国的調査であり、調査期間と調査対象が限られているため、なお多くの欠陥はあるにしろ、劃期的な林業労働者調査であることはいうまでもない(調査対象の地域的分布や職種・世帯類型等については前記「林業労働者の状態」参照。なお栄養状態のほか、その他の生活資料購入状態や道具代の調査結果については、林野庁「林業労働者の生活費調査報告」に詳細が発表されている)。

攝取栄養量

第169表は林業労働者の食需単位当り平均一日食品摂取量を示すものである。これによれば、穀類は八〇五グラムで五合七勺に相当する。このうち五九三グラムが配給食糧で、この内訳は基準配給量三八五グラム、労務加配二〇八グラムとなつている。加配米は伐倒関係の労働にしがたつた日について四二〇グラムづつ追加配給されることになつているが、食需単位当りで四二〇グラムより少量になつているのは、労務加配をうける日数が少いこと、および加配量が家族数に平均されて計算されているからである。

(註)それぞれ異つた家族構成と世帯人員をもつ世帯の食事内容、栄養状態を適確に比較できるようにするため、生活費の消費単位と同じように食需単位をつくり、これを基準にして栄養摂取量を分析することが行われているが、この単位は男子の中等労作を基準として一・〇とするのが普通である。しかし、この調査では、「今まで労研において調査した職種別・性別・年令別消費熱量あるいは攝取熱量に関する諸資料をもとにし、現実にその七〇%が所属するところの集運材夫を一・〇として、他の人々の食需単位を決定した」のである。ここでは集運材夫の平均攝取熱量は三三〇〇カロリーで、食需単位は造材夫一・〇五、保線夫〇・八五、成年婦人〇・七〇等となつている。

穀物摂取量の約三分の一は、ヤミ買いその他によつて供給されている。一日五合七勺の穀物消費は、一般都市労働者に比べると、かなり多量であるが、これは集運材等の林業労働者が重筋労働であるという事実のほかに、脂肪、動物性食品が一般に不足しているために生じているのである。

芋類の摂取量は都市に比べると多く、また豆類は、特にみそとして消費しているのであるが、都市・農村に比較しても多量である。みそ消費が特に大量であるのは、重労働に従事するため食塩摂取が要求されるためであろう。また注目されるのは果実の摂取が少ない点で、都市の二五%程度、農民に比べても低いことである。

動物性食品は非常に少い。農民にくらべてもその五五%で、食需単位当り魚介三六グラム、肉六グラム、卵ニグラム、合計わずか四四グラムである。

攝取栄養量

集運材夫を基準にした攝取熱量は三四九六カロリーであるが、この基準でみると、造材夫は三六七、保線夫は二九七二カロリーをそれぞれ摂取していることになる(第170表を参照)。したがって、カロリーの上からいえば、大体、消費熱量をカバーしていると考えられる。

熱量の八五%は澱粉性食品(主として穀類)に依存している。澱粉性食品による熱量摂取は一般に八〇%以下が望まれているが、林業労働者では八五%となっている点は注意されねばならぬ。蛋白質は一〇七・六グラムでこのうちの六五%は穀類からとられている。動物性蛋白質の少いことはいうまでもなく、豆類からの植物性蛋白が、かろうじてその欠を補っているわけである。なおこのほか、カルシウムは三七三グラムで比較的多く、ビタミンはB1とCは適量以上にとられているにかかわらず、AとB2は少い。ビタミンも、吸収率の高い動物性脂肪や卵からとられるよりは、人蔘、南瓜等から主として摂取されているので、実際の摂取はもつと悪いと推定されている。

世帯人員別栄養状態

林業労働者家族の世帯員の大小によって栄養状態はどのような変化を示すか。第171表はそれを示す。まず世帯員が増すに従つて栄養摂取量がしだいに減少することがわかる。カルシウムは二人世帯の四一三グラムに対し、四人では三八九グラム、七人では三二四グラムとなっている。蛋白質では、二人世帯一七・〇グラムに対し、七人世帯九八・六グラムとなる。もつともビタミンAなどは、世帯人員の多少にはそれほど影響されていない。

以上の林業労働者栄養状態を要約して、同報告はつぎのように記している。

(1)穀類の配給量は、全消費量の三分の二強を占めるにすぎず、残りの三分の一弱が非配給に依存しており、配給食糧が生活を維持する上に不十分であること。

(2)集運材夫を基準とした攝取熱量は三四九六カロリーで、だいたい必要量をみだしていると考えられるが、その八五%は穀類芋類などに依存し、余りにもその割合が高いこと。

(3)みその消費は多いが、優秀な蛋白源である動物性食品、特に肉・卵・乳類の攝取量は著しく過少であり、総蛋白中に占める動物性蛋白の割合はわずか七・八%に当る八・三グラムにすぎぬこと。

(4)カルシウムの攝取量は若干低く、ビタミンB1とCはだいたいよいが、AとB2、特にAの不足は著しいこと。

(5)夏山に比べると、冬山の攝取熱量が若干多く、しかも冬山では動物性食品をやや多くとつているが、物価が上昇し、実質賃金の低下した夏山では、野菜(ビタミンAなど)の消費が多いくらいで、あとは全面的にその内容が低下していること。

(6)世帯人員が多くなると、穀類、動物性食品(動物性蛋白)、その他全面的にその攝取栄養状態は悪化すること。

発行 1953年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

****年**月**日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1954年版(第26集)【目次】 次のページ→ ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
